

シノザキ

壺宵

だらりとぶら下がっている。

力が一切入らず、ただただぶら下がっている。

室内は薄暗く、かろうじて足下に畳が見える程度だ。畳ということは恐らく和室か。

ギイ ギイ

と耳障りな音が天井から聞こえてくる。この部屋の天井は確か、古い板張りだったはずだ。天井が軋んで、不快な音を立て続けている。

うるさいなあ、と思う。

なんとかならないだろうか、と思う。

一体どうしてこんなにも音が響いてくるのだろうか。

そして何より、どうしてこんなにも息苦しいのだろうか。

どこか漠然とした感覚を抱えながら考える。その間にも耳障りな音は鳴り止まない。息苦しきは徐々に強くなっていく。その間にもその音は聞こえ続けている。単調なその音は、じわじわと正気を奪っていくようだ。

頭を掻き毟りたくなってくる。それなのに体が言うことを聞かない。指先すら動かさせない。

ギイ
ギイ

——そのままどれほど経っただろうか。

なんの前触れもなく首だけが、すい、と動いた。畳以外の場所が映る。

映った先には縁側と、そこにちよこんと正座で座り込んでいる小さな人影があつた。少年だ。日が暮れかけているのか、赤みがかつたオレンジの陽光が差し込んでいる。小さな影は、白いシャツに黒い半ズボンを、それと同じ色のサスペンダーで留めている。逆光で顔立ちは分からないが、その少年はこの家の子だと何故か私は知っている。その向こう側には、ささやかな庭があるのが見えた。

少年はただ私を見ている。私も少年を見ていた。

ギイ
ギイ

式宵

――ギイ　　ギイ

と軋む音で目が覚めた。がくん、と大きな振動がきて、強かに側頭部を打ちつけてしまう。

車内が騒がしい。どうやら目的のホテルに着いたようだ。私は窓に頭をつけたままそつと外を見る。

ホテルの外観は古い。外壁は茶色く変色し、剥がれた部分が生白く晒されている。本当にボロボロだ。

数分でバスはホテルの正面入り口に着いた。

ホールに入ると、少しくすんだ白い壁と深く濃いダークブラウンの柱や扉がオレンジの明かりに照らされていて、一見落ち着く内装だった。

ホールから少し奥まった場所に移動する。飴が幾つか壁に貼り付けてあって、そのすぐ下に味の名前が書かれたプレートが貼ってあった。緑の飴が美味しそうで良い。名前をろくに見ずその味を手を取った。

「指定された部屋に皆さん移動してください」

同じ制服がひしめいている中、部屋の振り分けが始まる。それぞれ組み合わせられる。

——室内を真っ暗にしていれば、寝ている部屋が特定されても相手は誰が誰だか分からないだろう。部屋の割り振りが終わった。単独でその部屋に向かう。集団でいる方が危険だ。

大きな襖で閉められた一室に辿り着く。開けてみると広い和室だった。

一歩中へと足を踏み出した、直後。

首に衝撃が走ると同時に畳に叩きつけられた。

反射的に振り向くと誰かが何かを振りかぶっていた。私に向けている方向とは逆方向の棒の先に、鋭利な物が見えた。これは——槍だ。

柄で殴り倒されたのかと、打ち付けた痛みが残る頭のどこかで納得する。

頭部の痛みを気にせず脛を力任せに容赦なく踵で踏み抜くと、相手は転倒した。クラスメイトの女子。動けない。相手は立ち上がって、槍の刃を私に向けて、たった一言こう言った。

「ごめんね」

という声が、突然聞こえた。

風が強い。背丈と同じくらいの草が茂る草原の中、目の前には白いワンピースを着た少女がこちらを向いて立っていた。逆光で表情は見えない。でもこの子は今確かに微笑んでいる。

「ごめんね、さようならだね」

まただ。さようならなんて言わないでほしい。

どこにも行かないでとそう言いたい。

泣いてしまいそうになる。光が強くなり、視界が真っ白になっていく。

代わりに次から次へと文字が浮かぶ。

△泣きそう。泣いちゃうの？ ああほらもうすぐ泣いちゃうよ。泣かないで？ かわいそう。かわいそうに。▽

文字の羅列が視界に広がる。悲しくて堪らない。

本当に泣いてしまいそうになる。ああ、ああ。

言葉にならない感情が込み上げてきて、私は――

日の光強さを瞼に感じる。同時に意識が浮上していく感覚で、どうやら眠っていたらしいと分かった。静かに目を開けようとする、強い光に目が眩みそうになった。手で目元を覆う。ゆっくりと目を開け、何度かまばたいた。

青々とした緑が、目に入る。

不意に日陰が出来た。驚いて見上げると一人の少女がいた。ブロンドの髪を三つ編みにして、若草色をベースにした花柄のフリルワンピースを着ている。くすんだ青い目が印象的な、そばかすのある素朴な顔立ちの少女だった。

少女は少しの間私を見下ろすと、くるりと踵を返して、林道の入り口へと走っていった。入り口まで行くと彼女は私の方を振り向いた。ついてきて、ということらしい。

私は立ち上がると、紺色の半ズボンを軽くはたいて、少女を追いかけた。

日差しと日陰で斑模様が描かれている林道を走る。少女は意外と足が速く、何度か見失いそうになった。しばらく進むと、拓けた場所に出た。広場と言っても良い場所に、古びた洋館が森を背に建っている。庭なのだろう、下草は短く刈られていて、ちゃんと手入れがされていた。洋館の周りも、薔薇やハーブが植えられていた。

気付くと少女がいない。どこへ行ったのだろうと思うと、洋館に向かっていた。慌てて追いかける。「ダメだよ、勝手に入っちゃ」

声をかけるが、少女は既に洋館のドアを開けていた。その陰から顔を覗かせ、悪戯っぽく笑うとそのまま中へと入って行ってしまふ。慌ててまた追いかけた。

洋館の中は整然としていた。壁や棚には花が飾られており、人が住んでいる気配が漂っている。廃墟ではなくて良かったと安心しながら、少女を探す。装飾が施されたダークブラウンのドアを開けると、一人の女がいた。思わずギクリとする。

腰ほどまでの長くて艶やかな黒髪だ。ついまじまじと見ていると、女が振り返った。

「あら」

そう言って、はんなりと笑った。綺麗な人だな。そう思った。

「お客さんが来るなんて滅多にないから、驚いたわ」

紅茶とクッキーを出しながら女は言う。

「あの、ここに女の子来ませんでしたか？」

女は不思議そうな顔をして、いいえ見てないわ、と答えた。

「そうですか……」

紅茶を啜る。なんだかこの部屋に入ってから妙に眠い。沢山走ったからか、それとも緊張が薄れたからか。

そうしてその人と話をしている内に、いつの間にか意識は途切れていた。

目を覚ますとそこは薄暗かった。頬に当たっている床は硬くひんやりとしている。倒れているらしい。ここは一体どこなのだろう。目だけで周囲を窺う。壁も床も石で作られていて、窓は一切ない。まるで牢獄だ。

起き上がろうとするが何かで固定されているのか動かせられない。それどころか、全身が酷く痛んだ。重く軋んだ音がどこかから聞こえてきた。人の声と足音がする。

目の前に何かが来た。ほっそりとした白い足首が見える。あの女の人だ。

私は必死で首を捻って顔を動かした。女は微笑を湛えている。ぞっとした。魔女、の二文字が脳裏に浮かんだ。

「まだ狂っていないなかったのね」

微笑みながら言った魔女の、その言葉を最後に、意識が途切れた。

伍宵

ふ、と我に返った。

煌々とした明かりの中、高さのある商品棚が並んでいる。

さながらホームセンターのようであり、コンビニのようでもあった。

商品棚には様々な物が乱雑に置かれていて、そしてそのほとんどは床へ散らばっていた。恐らく天井付近にあった窓のものなのであったのだろう、床に落ちた商品に混ざってガラス片が煌いている。

——そうだ、何かを持って避難しなければならない。

避難先は既に知っている。前もって住民全てに勧告されていた。

私は漠然とした心地でその中を歩く。ぱきん、ぱきん、とかすかな音を立てて床に散乱したガラスが細かく割れる。

探索していると、工具が大量に置かれている棚があった。何かないだろうかと探す。

大振りのスパナがあった。握りこむと良い感じに手に馴染んだ。これにしよう。

そうして建物内を探索していると、人が一人、商品棚の前に屈みこんでいた。背格好から見るに男だ。話しかけるかどうか少し躊躇ったものの、見かけた人はこの人だけだ。話しかけてみることにした。

「こんにちは」

男は驚いたように私を見た。

「避難しないんですか？」

「ああ、ほら。何か持っていかなければいけないでしょう？　避難はその後にしよう」と

男の手には蛇腹の白く長いホースが握られていた。

「それを持っていくんですね」

「ええ」

では行きましようか、と出入り口へと向かった。

地下のドームへと続く階段には、みっちり人々で埋め尽くされていた。

階段の途中、ドームの剥がれた壁の隙間から外の景色が見える。そこから強い風が吹き込んでくる。

荒涼とした砂漠。空はにび色に濁り砂煙が舞い上がっていて、その向こうには傾いた時計塔が見えた。

ごうん ごうん ごうん ごうん

轟音が迫ってくる。ドームの天井にぽっかりと空いた穴を、分厚く濁った雲が覆っている。

ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん ごうん

世界が、終わる。

ここは一体どこなのだろう。ぐるりと周囲を見渡すと同時に、焦燥感に駆られた。

そうだ、ここは倉庫で、私は逃げていた。隠れながら逃げて、それを続けて、ほうほうの体で遊覧船のような船に転がり込んで、ここまで来た。

そう、逃げていた相手は女だ。その女には見覚えがある。幼馴染だ。

本当に、幼馴染の女なのだろうか？

彼女が手に持っている物がなんなのかを私は知っている。本来なら人に向ける物ではない。

先程遊覧船の中から見ただけ彼女の表情は能面のように、黒々とした目で私の方をじいつと見続けていた。日の当たらないコンテナの陰にいるせいだろうか。ぶるりと体が震える。

彼女は頭がおかしい。いや。

もしかしたら、あの女は、幼馴染の振りをしているだけなのではないだろうか。

怖気が走る。幼馴染はあの女に殺されているのだろうか。

殺され、自分の容姿を奪われ、私を殺しに――

コツン

と、音がした。

全身が総毛立つ。

今ならまだ逃げられる。そう思うのに体が動かない。

コツン、コツンという音と共に、何か、硬く重い物を引きずるような音が、聞こえる。

心臓が破裂するのではないだろうかと思うほどに動悸がうるさい。いつそ本当に破裂した方が良いのではないだろうか。少なくとも、こんな目に合うくらいならそちらの方が余程マシに思えた。

音が近付いてくる。見つかったのだろうか、そんなはずはない気のせいだ。気のせいだと思いたいのには音は的確にこちらに向かっている。

音が止まった。

私の背後で。正確には私が隠れているコンテナの前で。

ズズ、と。大きく引きずる音が響いたように感じるのは、至近距離に女がいるせいだろうか？

「みいつけた」

第×宵

これこそが現実なんだろうか。

あるいは、これも夢なのだろうか。いや、夢のはずだ。

今までだってそうだったではないか。

これだってきつとそうなのだ。

いや、例え、そうでなかったとしても、私はこれでやつと報われるはずだ救われるはずだ。

——そう思わなければあまりにも理不尽ではないか。

私は納屋に向かう。建付けの悪い納屋にある荒縄を鷺掴みにする。

表情がひどく引き攣っているのが分かった。

恐ろしくて恐ろしくて堪らないはずなのに、何故笑っているのか。私は頭がおかしくなってしまったのだろうか。

小さな卓袱台を引きずり出し鴨居の下に投げようように置いた。鈍い音が響く。

——もう嫌だ。もう、嫌だ。どれが現実なのだ。どれも現実ではないのか。

鴨居に荒縄を巻き付ける。外れないよう、何度も何度も巻いては縛りを繰り返す。

全ては夢で。——ならばこれもきつと夢なのだ。

輪を作る。その輪も外れないようにしなければならぬ。出来る限り短めに、足が着いてはいけない。

「は、ははは、はは」

掠れ引き攣った声が漏れる。

さあ、いこうか。

あとがき

ギリギリで滑り込みやがったシノザキです。

漢字で書くと忍崎です。

初めましての方は初めまして。

お久しぶりの方はお久しぶりです。

早速本題と行きますよう。

手短に、軽く、さらっと。

今回のお題〈夢〉との事で、こういった形式にしよう、と前もって考えておりました。

各章が『章』ではなく『宵』なのは、常に夢を見ているような状態の内容にしたかった為。壺式参なのは何故か。それは私の趣味に他なりませんのでお気になさらず。

因みに今回、全十章となる予定でしたが執筆していたら何故か軽く7000字に達するという、予想外の事件が起きた為（それも投稿ギリギリで）、削りに削って全七章と相成りました。自分の夢を基盤に書いていたので、情景描写が細かくなつたのがいけないのでしようね。

ううん難しい。

今回推敲も何もしていないに等しいので、恐らく誤字脱字が目立つかと思われます。申し訳ございません。後ほど推敲後、差し替えます。

それより、私は、自分の体力尽きるの早すぎ。

以上、シノザキでした。